

長崎県五島列島福江島崎山方言における 動詞屈折形態論の記述

言語学・応用言語学専門分野
2016年(平成28年)入学
立山 芽衣
2020年(令和2年)1月提出

要旨

本研究の目的は、長崎県五島列島福江島崎山方言（以下、崎山方言）の動詞屈折形態論を包括的に記述することである。五島列島は大きく上五島と下五島に分かれ、福江島は下五島に位置する。上五島に関しては、中村（2019）が宇久島野方言の動詞形態論の記述を行っているが、下五島方言の動詞形態論に関する研究は福江島に特化しており、テ形表現について（有元 1990）、動詞語幹の ui 交替について（有元 1992）や表現方法に特化した（上村 1970）など、部分的な記述に留まる。

そこで本研究は、崎山方言の動詞形態論について、特に屈折形態論に的を絞って記述を行う。国文法の活用表を前提とした従来の五島方言の動詞活用記述と異なり、動詞を従接（すなわち「きれつづき」）の観点から、定動詞（文末終止）と副動詞（副詞節）にわけ、当方言の共時体系に即した屈折体系を記述する。

上記を行いながら、五島の方言の音韻論の先行研究である古瀬（1983）が提示する音素目録の設定が崎山方言でも妥当かどうかも検討し、整合性が取れない場合は音素設定の再考も行った。すなわち、本研究では、動詞形態論だけでなく、動詞形態論を見据えた音韻体系の包括的な記述を目指す。

目次

1.はじめに	1
1.1. 地理	1
1.2. 系統	1
2. 音韻論と表記	4
3. 先行研究	6
3.1. 音韻論	6
3.2. 動詞形態論	7
3.3. 動詞の体系と語幹クラス	8
4. 崎山方言の動詞屈折形態論の記述の準備	10
4.1. 用語	10
4.1.1. 語・接語・接辞	10
4.1.2. 屈折と派生	11
4.2. 調査法	12
4.3. 調査に使用する語幹	12
4.4. 例文の表示方法	13
5. 崎山方言の動詞屈折形態論	14
5.1. 概観	14
5.2. 定動詞	14
5.2.1. 直説法	15
5.2.2. 命令法	17
5.2.3. 禁止法	17
5.2.4. 希求法	18
5.3. 副詞節	20
5.3.1. 中止形	20
5.3.2. 条件	20
5.4. 語幹クラス	21
5.4.1. 概要	21
5.4.2. /s/語幹動詞の形態音韻交替	22
5.4.3. 直説法非過去肯定における促音化	23
5.4.4. 中止形・過去形の形成	23
5.4.5. 希求形の形成	24
5.4.6. 変格活用動詞	24
6. 上五島方言（中村 2019）との比較	27
6.1. 音素と音声の比較	27

6.2. 活用形の比較	27
6.3. 屈折体系の比較	28
6.3.1. 直説法	28
6.3.2. 連体節	29
6.3.3. 命令法	29
6.3.4. 希求法	29
6.3.5. その他	30
6.3.5.1. 疑問	30
6.3.5.2. 推量	31
7. 今後の課題	32
付録	33
参照文献	46
グロス一覧	47

1. はじめに

本論文の目的は、長崎県五島列島福江島崎山方言（以下、崎山方言）の動詞屈折形態論を記述することである。本章では、崎山方言の地理と方言区画について述べる。

1.1. 地理

崎山方言が話されている福江島は、長崎県西部沖の五島列島に属する。五島列島は長崎港から西に約 100km に位置し、大小 150 余りの島々（うち有人島は 18）で構成されている。五島列島の中でも福江島、から奈留島までを下五島、奈留島から北を上五島と呼ぶこともある。福江島の人口は 36,728 人（2019 年 11 月 30 日現在）である。¹

崎山方言が話されている地域は、福江島の中でも図 1 に示す福江地方に属する。

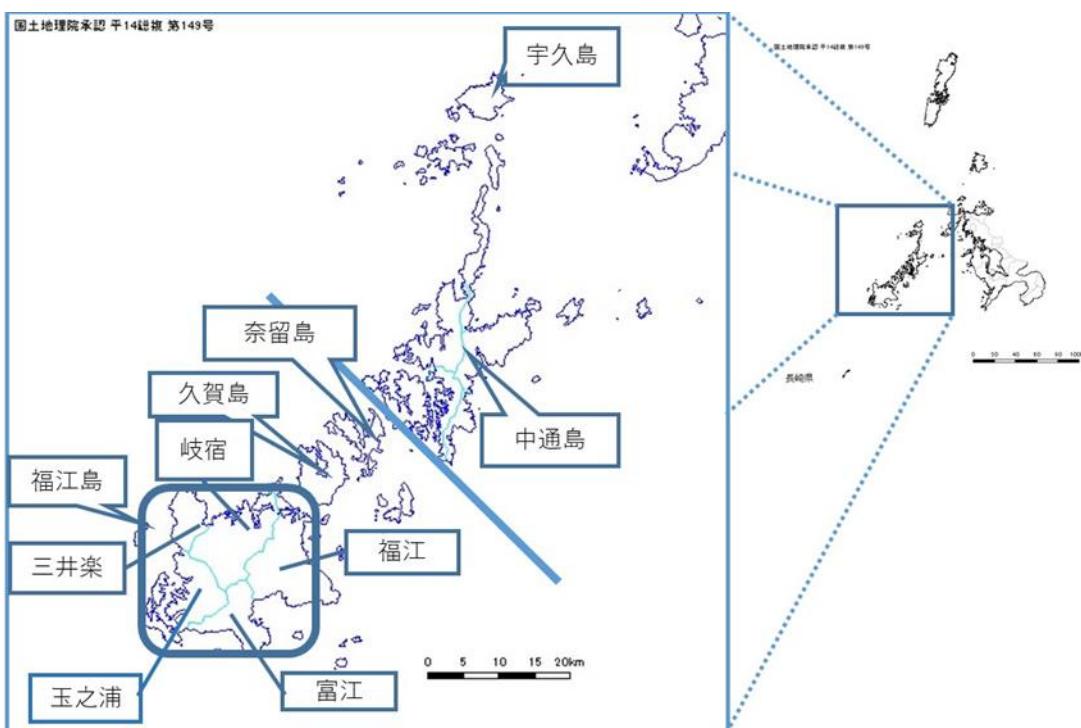


図 1. 五島列島の地図²

1.2. 系統

九州方言に関して、共通革新（shared innovation）に基づいた下位系統分類の定説はない。音韻・形態・語彙の類型的な特徴による分類（方言区画）については、東条三分説、すなわち豊日方言・肥筑方言・薩隅方言の 3 区分が最も広く受け入れられている（上村 1983）。

¹ <https://www.citj.goto.nagasaki.jp/> (2020 年 1 月 2 日最終閲覧)

² 本論文における地図は全て ken map で作成。

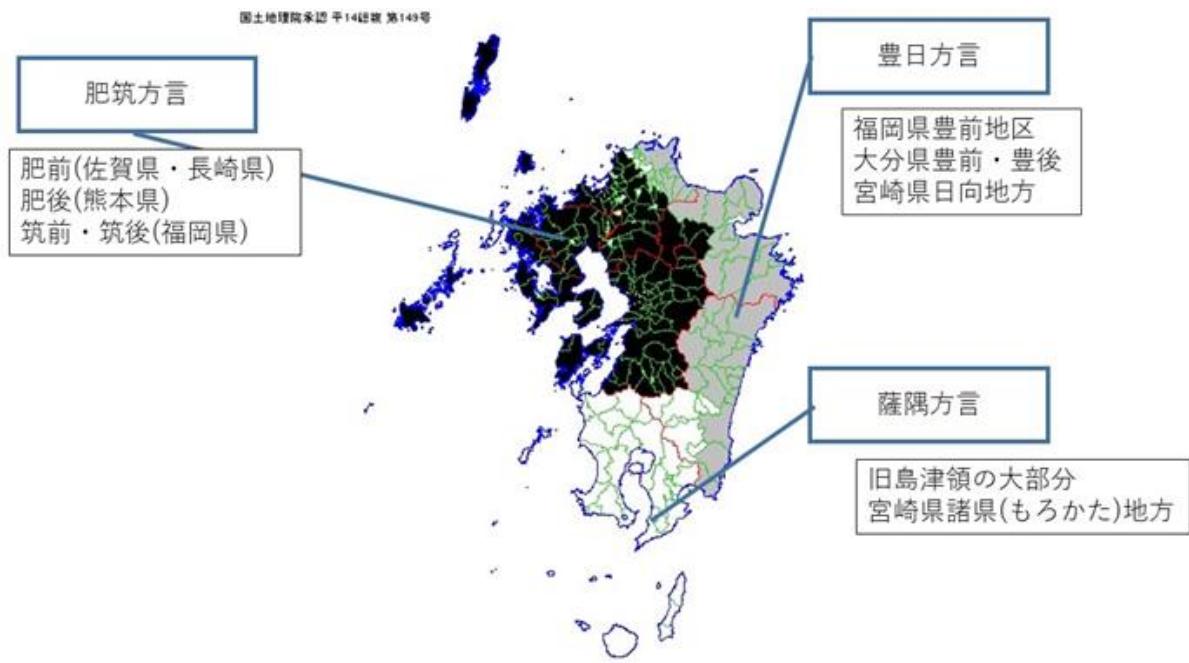


図2. 九州方言の概要 (古瀬 (1983) をもとに筆者一部改変)

肥筑方言は、肥前 (佐賀・長崎両県) ・肥後 (熊本県) 、筑前・筑後 (福岡県) の方言の総称である。該当地域が広いため、共通点があまり列挙されていないが、重母音の長音化 (例: 歳暮[se:bo]) や形容詞がカ語尾 (例: 青い[aoka]) になることが挙げられている。

長崎県全般の方言について、西島 (1963) は旧藩時代の行政区画を参考にして、アクセントと方言系統 (東条三分説に準ずる) から、長崎県の方言を対馬・壱岐・平戸・五島・大村・諫早・島原・長崎に分類し、中でも五島方言は、一型アクセントである。

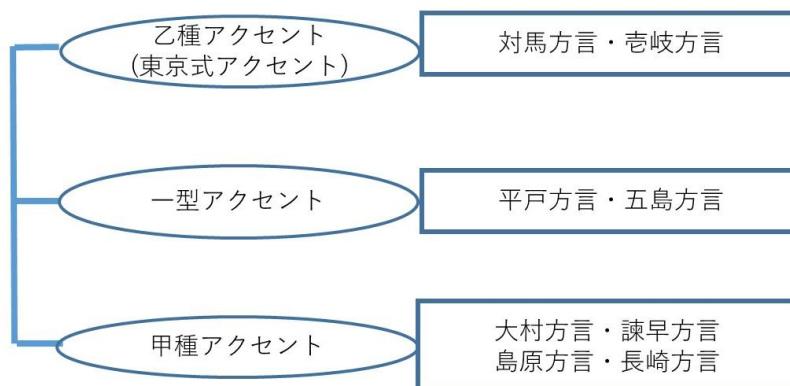


図3. 長崎県全般の方言区画(西島 1963 : 34)

五島列島の方言は長崎方言と同様の特徴を持つ一方、平山ほか（1969）や上村（1969）では、音韻的相や文法体系から、肥筑方言の位置にありながら鹿児島の方言などにも通ずる特色もあるとしている。

五島列島の方言は、地域差が大きく（古瀬 1983）、内部の方言区画については以下の3つが提言されている。第一に、久保・橋浦（1937）では、全島の方言を品詞ごとの特徴をもとに三区分に分け、富江系・福江系・浜の浦系の三大系を立てている。第二に、浦（1968）では、旧藩時代の所領に基づいた区分から、福江系・富江系・平戸系・大村系の四大系をたてている。第三に、平山ほか（1969）はカトリック教徒の方言と地下の方言に二分するのが妥当だとしている。

本論文が対象とする崎山方言は、五島列島最南端の福江島に位置する。古瀬（1983）は、福江島の方言の区分を、原因・理由を表わす接続詞「から」と用言の連体形に接続して既定順接条件句をつくる「ので」に相当する方言形「ケン」「セン」「テン」の三態の勢力関係をもとにして5つに区分している。

- (1) 玉之浦町…ケン、テン
- 福江市…テン、ケン
- 岐宿町…テン、セン
- 富江町…セン、ケン、テン
- 三井楽町…テン、ケン、セン

（左から順に勢力が強いもの。未記載は使用されないもの。）

[古瀬 1983 : 184]

2. 音韻論と表記

本論文では、///で基底形の音素表示、//で表層形の音素表示を行う。また、[]で音声を表示する。

五島の方言に関する音韻論について、平山ほか（1969）では、五島列島を福江、玉之浦、富江、三井楽、樺島、奈留、若松、魚目、上五島、岳郷（キリスト教徒）の方言に分類して記述している。そのうち、福江方言について、平山ほか（1969）が設定した音素を表1に示す。平山ほか（1969）の記述には、調音方法に関する記述はない。古瀬（1983）も同様の音素を設定しているが、喉頭音（'）、長音（E）、促音（Q）、撥音（N）は設定されていなかった。

表1. 福江方言の音素

子音音素 (C)	喉頭	h ' ,
	後口蓋	k g
	前口蓋	t d c s z r n
	両唇	p b m
	促音（成拍）	Q
	撥音（成拍）	N
半母音音素 (S)	前口蓋	j
	両唇	w
母音音素 (V)	前舌	i e
	中舌	a
	奥舌	u o
	長音（成拍）	E

[平山ほか 1969 : 24-25]

一方、本論文が崎山方言に対して設定する音素は以下の表のとおりである。モーラ音素は設定しない。先行研究で設定されていた喉頭音は音声データが少ないと判断した。

表 2. 崎山方言の子音の音素体系

	両唇	歯音	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂	p,b	t,d		k,g	
鼻音	m	n			
ふるえ音		r			
摩擦音		s,z			h
接近音	w		j		

表 3. 崎山方言の母音の音素体系

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

ほかに、半母音音素としてjを設定する。

3. 先行研究

本章では、五島列島方言の音韻論・動詞形態論の先行研究を概観する。

本論文が記述対象とする崎山方言の屈折形態論を詳しく扱った先行研究は存在しない。崎山方言を含む下五島方言全般に関しては、五島列島の方言を地域ごとに分類して記述した平山ほか (1969)、比較方言学的な観点から動詞形態論の概要を示した上村 (1970)、テ形相当形式の形態音韻論に特化した有元 (1990) がある。以下ではまずこれらを検討し、問題点を指摘する。

なお、下五島諸方言以外の五島方言にまで範囲を広げると、上五島方言の屈折形態論を詳しく論じている中村 (2019) がある。これについては、本論で崎山方言の体系を示した後、6. 章で比較・検討する。

3.1. 音韻論

下五島方言の音韻に関する先行研究に、平山ほか (1969) がある。平山ほか (1969) は前述のように福江方言の音素を設定し、(2)～(5) に示す規則を設定している。しかし、(2)～(5) の例が示すように、語の歴史的変化、共時的変化、標準語との対応が区別されず併記されており、記述としては整合性がとれない。本論文で音韻論を記述する際は、共時的変化のみを記述する。

- (2) 「キ、 ク、 チ、 ツ、 ビ、 リ、 ル」にあたるものは入声音の/Q/[T]になる

例 : /seQ/[ʃeT] (咳)

[平山ほか 1969 : 36、 37]

- (3) 「ギ、 グ、 ジ、 ズ、 ニ、 タ、 ブ、 ミ、 ム」にあたるものは/n/[n]になる

例 : /min/[min] (右)

[平山ほか 1969 : 37]

- (4) 「シ、 ス」にあたるものは/hɪ/[çɪ]になる

例 : /tohi/ [toçɪ]

[平山ほか 1969 : 39]

- (5) 「イ、 ウ」にあたるものは以下のとおり

ai→jaa 例 : //hai//→/hjaa/ (灰)

ui→ii 例 : //tʃuita//→/tʃiita/ (着いた)

au→aa 例 : //arau//→/araa/ (洗う)

uu[uu]→uu[u:] 例 : //nuu///[nuu]→/nuu/[nu:] (縫う)

ou→oo 例 : //majou//→/majoo/ (迷う)

[平山ほか 1969 : 39、 40 をもとに筆者一部加筆]

3.2. 動詞形態論

有元 (1990) は、五島列島福江島下崎山町方言において、標準語のテ形にあたる表現どのような形式で表れるかについて扱っている。下崎山町は、崎山方言が話される地域のうち、南側に位置する町である。有元 (1990) は、下崎山町方言における「～てきた」などの「テ形」に関して (6) の 2つがある。

- (6) a. [te] や [de] で表れる形
 b. 促音や撥音として表れる形

(6) が許されるか否かの基準は、(7) (8) のように設定している。

- (7) 「テ」の部分に促音や撥音が現れる場合

語幹末が子音の時、基底形 /te/ が消去されたと考える

/kas-te# ki-ta/ [kakkita]

[有元 1990 : 81 (8)]

語幹末が母音のとき、基底形 /te/ の /e/ を消して同化したと考える

//de-te# ki-ta// → /e/ を消去 → de-t#-ki-ta → 同化 → [dekkita]

[有元 1990 : 81 (11a)]

- (8) 「テ」の部分に促音や撥音の現れる形が許されない場合

語幹末子音が /r, t, n/ であるとき = 語幹末子音が非継続的歯音であるとき

語幹末母音が /i/ であるとき

[有元 1990 : 31 (4) a, b, (5)]

(8) の具体例を表 4 に示す。

表 4. 促音や撥音の現れる形が許されない場合

語幹末文節音	[te] や [de] の現れる形	促音や撥音の現れる形	
r	tottekita	*tokkita	取ってきた
t	kattekita	*kakkita	買ってきた
n	sindemiroka	*simmiroka	死んでみようか
i	mitekita	*mikkita、 *mikita	見てきた

[有元 1990 : 82 表 2 より筆者一部抜粋]

ここまで概観したように、有元（1990）は標準語の「～てきた」にあたる形式の「て」が下崎山方言においてどのように表れるかを記述している。しかし、有元（1990）は「～てきた」の分析にとどまっており、標準語における「テ」が使われるほかの環境においても、（6）（7）（8）の規則が適用されるかは具体的に検証していない。

3.3. 動詞の体系と語幹クラス

上村（1970）は、五島方言の動詞の体系について、大きく3つの特徴をあげている。

① 基本形（終止連体）、連用形（中止形、接続形）は、五段活用型（ワ行、サ行を除く）では同じ語形を示す。

例：[naQ]：泣く、泣き、泣いて

[toN]：飛ぶ、飛び、飛んで

例外：言う…[juu]：言う、[ii]：言い、[juQ]：言って

歌う…[utau]：歌う、[utai]：歌い、[utoQ]：歌って

受ける…[ukuQ]：受ける、[uke]：受け、[ukeQ]：受けて

出る…[zuQ]：出る、[de]：出、[deQ]：出て

来る…[kuQ]：来る、[ki]：来、[kiQ]：来て

する…[suQ]：する、[si]：し、[siQ]：して

② 仮定形と命令形はどの動詞も同じ語形を示す

例：[nake]：泣けば、泣け

[ukere]：受ければ、受け

③ ①②より、五島方言の下二段・カ変・サ変の仮定形は一段活用化の様相を呈す。

上村（1970）が③において一段活用化の様相を呈すと指摘しているのは、表5のように仮定形が「うくれ」から「うけ」に変化していることに着目した記述である可能性がある。

表5. 「受ける」の活用（上村 1970 をもとに筆者作成）

	未然	連用	終止	連体	仮定	命令
標準語	うけ	うけ	うける	うける	うけ	うけろ
五島	うけ	うけ	うく	うく	うけ	うけ
古典語	うけ	うけ	うく	うくる	うくれ	うけよ

ただ、上村（1970）は、従来学校文法で提示された活用形のみを調査している。五島方言

を記述する上で、学校文法の活用形と対照することが適しているかは不明である。

なお、上村（1970）が参照した平山ほか（1969）や古瀬（1983）は、福江島方言の動詞の活用を未然形、連用形、終止・連体形、命令形のほかに、条件形、志向形、完了形を設定し、計7つの活用形をたてている。平山ほか（1969）と古瀬（1983）の活用形についてまとめたものを表6に示す。

表6. 先行研究による福江市方言の動詞の活用の比較

活用形	平山ほか	古瀬
未然形	カカ	カカッ
連用形	カッ	カッ
終止・連体形	カッ	カッ
条件形	カケバ	カケバ
命令形	カケ	カケ
志向形	カコ	(なし)
完了形	カ一	キャタ、キャータ

[平山ほか 1969:80、古瀬 1986:198 を参考に筆者作成]

平山ほか（1969）や古瀬（1986）には、動詞語幹と接辞の境界を明示していない、特定の動詞の活用形しか示していないという問題がある。本論文では、学校文法で設定された活用形以外の活用形も記述する。また、語幹と接辞の境界線を明確にし、語幹によって接辞の形が異なる場合も網羅的に記述する。

4. 崎山方言の動詞屈折形態論の記述の準備

本章では、崎山方言の動詞屈折形態論を記述するにあたり用いる用語を定義する。

4.1. 用語

4.1.1. 語・接語・接辞

本論文で扱う形態論は、語の内部を対象としている。形態論的分析を行うためには、対象言語において語の内部と語の外部の要素を峻別する必要がある。

本論文が対象とする崎山方言の動詞の構造に関しては、左端に語根が生じ、それに様々な拘束形態素が付属して語が形成される。よって、どの拘束形態素までが語の内部にあり、どの拘束形態素からが別の語に属するかを峻別しなければならない。すなわち、接辞（語の内部の拘束形態素）と接語（それ自体で語を形成する拘束形態素）の区別が重要になる。新永（2019：76）は、「それのみでは自立的に発話できず、特定の語幹にのみつくことができる形態素」を「接辞」、「ある一つの方言において音韻的・形態的・統語的基準から見て、自立語とも接辞とも良いきれない形態素」を「接語」としている。端的に言って、接辞は語幹につくのに対し、接語は句や節につく。よって、接語は接辞と違って常に語につき、しかも様々な品詞の語につく。

本論文では、拘束形態素が語幹にのみつくのか（接辞）、多様な語につくのか（接語）という共起制限の観点をもとにして、接辞か接語かを区別した。今後、接辞境界を-（ハイフン）、接語境界を=（イコールサイン）を付して区別する。

さらに、語の内部の要素である、語基、語根、語幹について、渡辺（2014）を参照して（9）のように設定する。

- (9)
 - a. 語基…語の一部で、接辞が付与される部分
 - b. 語根…語彙的意味を担う形態素
 - c. 語幹…語から屈折接辞を取り除いた部分

ここで定義した用語の範囲について、具体的に表7に提示する。

表7. 本論文における用語の定義

語		接語	
	(派生) 接辞	(屈折) 接辞	
kak-	-ase	-ta	=jo
語根	接辞	接辞	接語
ase にとっての語基			
ta にとっての語基			
語幹		屈折接辞	接語

4.1.2. 屈折と派生

屈折と派生の境界は自明ではない。これらを区別する観点は様々であって、Haspelmath and Sims (2010) は表8の11の観点を挙げている。渡辺(2014)や江畑(2019)は、表8を屈折と派生の定義としてではなく、屈折と派生がもつ特徴として取り上げている。

表8. 屈折と派生 (Haspelmath and Sims 2010:90、渡辺 2010 訳を参照)

屈折	派生
統語法への関連がある	統語法への関連がない
義務的表示	義務的ではない
適用の制限なし	適用の制限あり
語基と同じ概念	新たな概念
抽象的意味	具体的意味
意味の合算性	意味の非合算性
語の周辺部に位置	語基に近い位置
語の異形態がより少ない	語基の異形態がより多い
語類の変化なし	語類の変化を起こすことがある
累積的表現あり	累積的なものはほとんどない
反復性がない	反復されることがある

このように、動詞においてどのようなカテゴリーが屈折的であるかを定めるのは簡単ではないが、風間(1992)や下地(2015、2019)、江畑(2019)といった日琉諸方言の屈折に関する先行研究が指摘するように、総じて品詞を変えず、生産的に様々な語幹につき、動詞を閉じる位置(すなわち語末)に生じるもののが屈折的であるのは確かである。本論文ではひとまず、この観点に沿って崎山方言における屈折を「品詞をかえず、様々な語幹につき、動詞を閉じる位置につくもの」と定義する。のちに示すように、崎山方言の屈折カテ

ゴリーは肯定・否定、テンス・モダリティ（希求・命令・単純終止など）・従接（文末終止、連用接続、連体接続など）である。

4.2. 調査法

五島の方言全般に長けた N 氏（調査時 66 歳、女性）に対話調査を行ったあと、崎山方言話者の M 氏（調査時 88 歳、女性）に調査票に基づいた対話調査を行った。調査では、例文の状況説明の後、筆者が標準語で例文を発話し、場合によっては筆者の内省である長崎方言でも発話をしたあと、話者に崎山方言で発話してもらう形をとった。

調査で屈折諸形式を収集する際、国立国語研究所の「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（プロジェクトリーダー、木部暢子）で用いられている調査票をもとに、加筆・修正したもの用いた。本論文では、文末終止の部分を重点的に調査し、副詞節の記述の端緒として中止形と条件形を調査した。

表 9. 調査した内容

記述詳細項目 1	記述詳細項目 2
テンス	過去
テンス	非過去
モダリティ	非現実
モダリティ	勧誘
モダリティ	命令
モダリティ	丁寧
モダリティ	禁止
疑問	疑問 1（焦点領域内）
疑問	疑問 2（前提領域内（名詞化））
疑問	否定疑問
証拠性	推量
証拠性	希望
証拠性	伝聞

4.3. 調査に使用する語幹

記述に際して用いる動詞語幹を表 10 に示す。語彙や動詞の分類は有元（1990）を参照しており、動詞の分類も有元（1990）に従っている。本論文で設定する語幹クラスについては、5.4. で述べる。

表 10. 調査語彙 (有元 (1990) をもとに筆者一部改変)

分類	語幹	標準語
子音語幹	jom-	読む
子音語幹	tob-	飛ぶ/跳ぶ ³
子音語幹	sin-	死ぬ
子音語幹	nug-	脱ぐ
子音語幹	kak-	書く
子音語幹	kas-	貸す
子音語幹	kat-	勝つ
子音語幹	tor-	取る
子音語幹	kaw-	買う
母音語幹	ki-	着る
母音語幹	ne-	寝る
強変化	ku-	来る
強変化	su-	する
強変化	ik-	行く

4.4. 例文の表示方法

本論文では、例文を (10) のように表記する。

- (10) 1 行目 音韻表記 (イタリック)
- 2 行目 形態素分析
- 3 行目 形態素ごとのグロス
- 4 行目 標準語訳

³ 筆者の調査では「飛ぶ」と「跳ぶ」で活用の違いは見られなかったため、併記する。

5. 崎山方言の動詞屈折形態論

5.1. 概観

崎山方言の屈折体系を表 11 に示す。

表 11. 屈折接辞の一覧

			肯定	否定
定動詞	直説法	非過去	-ru	-n
		過去	-ta	
	命令法		-e/-re,-ro ⁴	
	禁止法		-una/-nna	
	希求法		-oH/-joH	
副動詞	中止	-te		-nde
	条件		-reba	

表 11において、-x/-y のように併記されている形態素（定動詞命令法の-e/-re、-ro など）は、-x が子音語幹専用の接辞、-y が母音語幹専用の接辞であることを示す。語幹クラスについては 5.4. 節で記述する。

定動詞のうち、直説法だけがテンスで屈折し、さらに肯否でも屈折する。なお、否定形にテンスの対立が見られないが、これは否定過去の形が否定非過去+コピュラの分析的手法を用いるからである（例：/joma-n=zjar-ta/「読まなかつた」、cf：/joma-n/「読まない」）。これについては 5.2.1. 節で詳述する。また、希求法は音声の実現に幅があり、H は音声の実現が長音からグロッタルストップ(?)までで揺らぎがあったことを示す。

副動詞は、本論文では中止形（いわゆるテ形）と条件形のみを扱っているが、当方言の副動詞はこれらに限られない。その全容の解明については今後の課題としたい。

以下では、それぞれの接辞について、例文を挙げつつ紹介する。例文は、2019 年 11 月 22、23 日に調査したのち、2020 年 1 月 8 日に電話調査で再度確認して文脈を補足したものを提示している。

5.2. 定動詞

定動詞は、文末終止に用いられる屈折諸形式である。これらをさらに、直説法/命令法/禁止法/希求法に区分する。直説法は、連体節の述語としても用いられる形であるが、命令・

⁴ ただし、ku-（来る）については、ほかのどの動詞語幹とも異なる-i をとる。詳しくは 5.4.6. 節で述べる。

禁止・希求法は文末終止に限定される。

5.2.1. 直説法

(11) 非過去肯定

<i>orjaa</i>	<i>ituden</i>	<i>honba</i>	<i>jomu.</i>
<i>ora=wa</i>	<i>ituden</i>	<i>hon=ba</i>	<i>jom-ru</i>
私=TOP	いつでも	本=ACC	読む-NPST

「私はいつでも本を読む。」

(12) 過去肯定

<i>son</i>	<i>honwa</i>	<i>moo</i>	<i>jonda.</i>
<i>son</i>	<i>hon=wa</i>	<i>mou</i>	<i>jom-ta.</i>
その	本=TOP	もう	読む-PST

「その本はもう読んだ。」

(13) 非過去否定

<i>orjaa</i>	<i>honba</i>	<i>jomanjo.</i>
<i>ora=wa</i>	<i>hon=ba</i>	<i>jom.a-n=jo</i>
私=TOP	本=ACC	読む.THM-NEG=SFP

「私は本を読まないよ。」

過去否定の形は、非過去否定形で動詞を閉じ、それに続くコピュラ=zjar-⁵がテンスで屈折するという分析的な方法をとる。よって以下の例において、(形態論的には非過去否定形と同形の)-nにはNEGとだけグロスをふってある。

(14) 過去否定

<i>orjaa</i>	<i>honba</i>	<i>jomanzjattajo.</i>
<i>ora=wa</i>	<i>hon=ba</i>	<i>jom.a-n=zjar-ta=jo</i>
私=TOP	本=ACC	読む.THM-NEG=COP-PST=SFP

「私は本を読まなかつたよ。」

⁵ =zjar-を用いたコピュラ文は以下のとおり。なお、コピュラの詳細は未調査である。

taroowa *ganbarijasanza.*
taroo=wa *ganbarijasan=zjar*
太郎=TOP 頑張り屋さん=COP
「太郎は頑張り屋さんだ。」

連体節の述語形式もまた、直説法をとる。すなわち、この方言に連体・終止の形式的区別はない。これはすでに上村(1970)などの先行研究が述べているとおりである。本節では、連体節を[]で表示する。

(15) 非過去肯定

<i>[honba</i>	<i>jomu]</i>	<i>tokja</i>	<i>sukina</i>	<i>toba</i>
hon=ba	jom-ru	toki=wa	suki=na	to=ba
本=ACC	読む-NPST	時=TOP	好き=ADN	FN=ACC

<i>jomeba</i>	<i>jokajjan.</i>
jom-reba	jo-ka=zjan
読む-CND	良い-NPST=SFP

「本を読むときは好きなものを読めば良いじゃない。」

(16) 過去肯定

<i>[honba</i>	<i>bissya</i>	<i>jonda]</i>	<i>kowa</i>	<i>homuttojo.</i>
hon=ba	bissya	jom-ta	ko=wa	home-ru=to=jo
本=ACC	たくさん	読む-PST	子=TOP	ほめる-NPST=SFP=SFP

「本をたくさん読んだ子は(私は)ほめるのよ。」

(17) 非過去否定

<i>[honba</i>	<i>joman]</i>	<i>tokja</i>	<i>nanba</i>	<i>suttona.</i>
hon=ba	jom.a-n	toki=wa	nan=ba	su-ru=to=na
本=ACC	読む.THM-NEG	時=TOP	何=ACC	する-NPST=Q=SFP

「本を読まないときは何をするの?」

連体節での過去否定の形は、やはり文末終止と同様に、非過去否定+コピュラの分析的手法を用い、それに名詞が後続する。

(18) 過去否定

<i>[honba</i>	<i>jomanzatta]</i>	<i>koden</i>	<i>joka</i>	<i>tokowa</i>
hon=ba	jom.a-n=zjar-ta	ko=den	jo-ka	toko=wa
本=ACC	読む.THM-NEG=COP-PST	子=AC	良い-NPST	ところ=TOP

jooke *attojo.*

jouke ar-ru=to=jo
たくさん ある-NPST=SFP=SFP
「本を読まなかつた子でも、良いところはたくさんあるのよ。」

5.2.2. 命令法

命令法の屈折接辞は子音語幹専用の-e⁶と母音語幹専用の-re/-ro からなる。ただし、サ変変格動詞 (su-) は、r 語幹化した ser-e と母音語幹のように-ro をとる se-ro の両方がある。詳しくは 5.4.6. 節で述べる。

(19) 命令法肯定

kobba jome.
ko=ba jom-e
これ=ACC 読む-IMP
「これを読め。」

(20) 命令法肯定 (母音語幹)

haj-o ne-re.
haj-o ne-re
早い-ADV する-IMP
「早く寝ろ」

(21) 命令法肯定 (母音語幹)

osokaken hajo nero.
oso-ka=ken haj-o ne-ro.
おそい-NPST=CONJ 早い-ADV 寝る-IMP
「遅い (時間だ) から、早く寝ろ。」

5.2.3. 禁止法

禁止法は、子音語幹専用の-una と母音語幹専用の-nna からなる。

(22) 禁止法(子音語幹)

sonna honba jomuna.

⁶ 命令接辞-e は母音語幹動詞についても容認される場合もあったが (例 : ne-e 「寝ろ」) 、他の母音語幹動詞で容認度に一貫性がみられなかったため、-e を子音語幹専用と定義する。

sonna hon=ba jom-una
 そんな 本=ACC 読む-PRH
 「そんな(悪い)本を読むな。」

(23) 禁止法(母音語幹)

<i>sjukudai</i>	<i>owattoran=to</i>	<i>jaken</i>	<i>mada</i>	<i>nenna.</i>
<i>sjukudai</i>	<i>owar-tor.a-n=to</i>	<i>jaken</i>	<i>mada</i>	<i>ne-nna</i>
宿題	終わる-ASP.THM-NEG=ASR	だから	まだ	寝る-PRH

「宿題が終わってないのだから、まだ寝るな。」

5.2.4. 希求法

希求法は、子音語幹動詞のとき-oH、母音語幹動詞のとき-joH

(24) 希求法(子音語幹、意志表現⁷)

<i>kjoowa</i>	<i>kon</i>	<i>honba</i>	<i>jomo.</i>
<i>kjoo=wa</i>	<i>kon</i>	<i>hon=ba</i>	<i>jom-oH</i>
今日=TOP	この	本=ACC	読む-INT

「今日はこの本を読もう。」

(25) 希求法(子音語幹、勧誘表現)

<i>agamo</i>	<i>kon</i>	<i>honba</i>	<i>jomode.</i>
<i>aga=mo</i>	<i>kon</i>	<i>hon=ba</i>	<i>jom-oH=de</i>
あなた=ADD	この	本=ACC	読む-INT=HORT

「あなたもこの本を読もうよ」

(26) 希求法(母音語幹、意志表現)

<i>kjoowa</i>	<i>moo</i>	<i>nejoo.</i>
<i>kjou=wa</i>	<i>mou</i>	<i>ne-joH</i>

⁷ 接語がつかない場合、動詞の実現する可能性はほぼ100%になるのに対し、実現するかどうかがあいまいな場合は接語を付与する。(願望表現)

<i>kondowa</i>	<i>an</i>	<i>honba</i>	<i>jomogotja.</i>
<i>kondo=wa</i>	<i>an</i>	<i>hon=ba</i>	<i>jom-oH=gotja</i>
今度=TOP	あの	本=ACC	読む-INT=INT

「今度はあの本を読みたい。」

今日=TOP もう 寝る-INT

「今日はもう寝よう。」

(27) 希求法(母音語幹、勧誘表現)

onnasi *hejade* *nejode.*

onazi *heja=de* *nejoH=de*

同じ 部屋=LOC 寝る-INT=HORT

「今日は同じ部屋で寝ようよ。」

直説法非過去肯定でも希求法(意志)をあらわすことが出来る。ただし、特定の接語(=zo)をつけて直説法と区別する。

(28) 希求法(子音語幹、意志表現)

kjoowa *kon* *honba* *jom-ru=zo.*

kjoo=wa *kon* *hon=ba* *jom-ru=zo*

今日=TOP この 本=ACC 読む-NPST=SFP

「今日はこの本を読もう。」

(29) 希求法(母音語幹、意志表現)

kjoowa *moo* *nejoo.*

kjou=wa *mou* *n-ru=zo*

今日=TOP もう 寝る-NPST=SFP

「今日はもう寝よう。」

また、母音語幹動詞のみ、希求法(勧誘)を直説法非過去肯定であらわすことが出来る。ただし、特定の接語(=zjan)をつけて直説法と区別する。子音語幹動詞は、(25)で示したように、希求法の接辞-oに特定の接語を付与する形のみである。

(30) 希求法(母音語幹、勧誘表現)

onnasi *hejade* *nudde.*

onazi *heja=de* *n-ru=de*

同じ 部屋=LOC 寝る-INT=HORT

「今日は同じ部屋で寝ようよ。」

5.3. 副詞節

5.3.1. 中止形

中止形は、いわゆるテ形相当形式であり、実際に日本語のテ形と同根である。

(31) 中止形肯定

<i>honba</i>	<i>zaamani</i>	<i>jonde</i>	<i>erakane.</i>
hon=ba	zaamani	jom-te	era-ka=ne
本=ACC	たくさん	読む-NRT	えらい-NPST=SFP

「(先生の立場から生徒に対して) 本をたくさん読んで(君は)偉いね。」

(32) 中止形否定

<i>honba</i>	<i>jomande</i>	<i>sotode</i>	<i>asobooja.</i>
hon=ba	jom.a-nde	soto=de	asob.a-o=ya.
本=ACC	読む.THM-NEG.NRT	外=LOC	遊ぶ.THM-INT=HORT

「(天気が良いから) 本を読まないで外で遊ぼうよ。」

中止形否定は、すでにみた直説法否定-n の形に-te が接続しているとみることが出来なくもない。しかし、そのようにすると、いったん直説法で屈折した動詞 (jom.a-n 「読まない」) が再び語幹となって-te で屈折するという特異な形態構造を認めることになる。本論文では、-nde を-te に対応する 1 つの屈折接辞とみる。⁸このようにみると、屈折形態論における重大な例外を回避でき、また定動詞の直説法と同様、肯否の区別があるペアとして、屈折体系において適切に位置づけることが出来る。

5.3.2. 条件

条件形は接辞-reba で形成する。子音語幹に接続する際、/r/は削除される。

(33) 条件形 (子音語幹)

<i>jomeba</i>	<i>jokazjan.</i>
jom-eba	jo-ka=zjan.
読む-CND	良い NPST=SFP

「(難しいからとあきらめずにその本を) 読めば良いじゃない。」

⁸ この議論は、禁止法-runa の分析についても同様に当てはまる。-runa は、見かけ上、定動詞直説法非過去肯定形-ru に、禁止の接辞-na がついていると分析できなくもないが、こうすると屈折した形式が再度語幹になるという問題が生じてしまう。よって中止形否定と同様、1 形態素として分析する方が良い。

(34) 条件形 (母音語幹)

<i>zjaako</i>	<i>nereba</i>	<i>hajo</i>	<i>jo-o</i>	<i>narujo.</i>
<i>zjaako</i>	<i>ne-reba</i>	<i>haja-o</i>	<i>jo-o</i>	<i>nar-ru=jo</i>
たくさん	寝る-CND	はやい-ADVLZ	良い-ADVLZ	なる-NPST=SFP
「たくさん寝れば早く (具合が) 良くなるよ。」				

5.4. 語幹クラス

本節では、崎山方言の動詞の語幹クラスについて記述する。なお語幹の後に.(カンマ)をつけて語幹と語幹拡張母音を区別する。

5.4.1. 概要

語幹クラスは、子音語幹、母音語幹、変格活用 (*ku-* (来る)、*su-* (する)) の3つに分かれる。変格活用語幹については、子音語幹・母音語幹を記述したのち、それらとの異同を記述する。

子音語幹は、語幹そのままの非拡張形と、語幹拡張母音を添加した拡張形 (/a/拡張形と/i/拡張形) の区別がある。

表 12. 子音語幹における語幹の異形態

	子音語幹								
	非拡張形	<i>kat-</i>	<i>kak-</i>	<i>kas-</i>	<i>tob-</i>	<i>nug-</i>	<i>jom-</i>	<i>sin-</i>	<i>tor-</i>
/a/拡張形	<i>kat.a-</i>	<i>kak.a-</i>	<i>kas.a-</i>	<i>tob.a-</i>	<i>nug.a-</i>	<i>jom.a-</i>	<i>sin.a-</i>	<i>tor.a-</i>	<i>kaw.a-</i>
/i/拡張形 ⁹	<i>kat.i-</i>	<i>kak.i-</i>	<i>kah.i-</i>	<i>tob.i-</i>	<i>nug.i-</i>	<i>jom.i-</i>	<i>sin.i-</i>	<i>tor.i-</i>	<i>ka.i-</i>

母音語幹は、上一段に遡る動詞と、下二段で活用する動詞の2種類がある。両者は、一部の屈折形で r 語幹の子音語幹のようにふるまう (表で *kiR-* と表示)。すなわち、r 語幹化する。例えば、否定接辞をつけるとき、子音語幹である *tor-* は/a/拡張形をとり、*tor.a-n* となる一方、母音語幹である *kiR-* は他の母音語幹動詞のようにそのまま非拡張形に-n をつける *ki-n* でもよいが、r 語幹化して/a/拡張形をとり、*kir.a-n* となることもある。

また、k-や n- のように、母音語幹でありながら、子音のみで語幹を形成する場合がある。これらは、直説法のときのみ用いられ、-ru の u が脱落して必ず接語を伴う形をとる(例：

⁹ /i/拡張形は、筆者の調査では 5.4.2. 節で述べる *kas*-語幹の異形態のみ、動詞屈折形態論のなかで表れた。しかし、「書き方」といった/i/拡張形が名詞に付与される表現が調査の中でみられたため、本論文では *kas*-語幹以外にも/i/拡張形を設定している。/i/拡張語幹を用いる場合の詳細は未調査である。

/n-ru=zo/[nuzzo])。

表 13. 母音語幹における語幹の異形態

	着る		寝る	
語幹	k-	kiR-	n-	neR-
非拡張形	k-	ki-	n-	ne-
/a/拡張形		kiR.a-		neR.a-

5.4.2. /s/語幹動詞の形態音韻交替

子音語幹のうち、/s/語幹は特殊な点が多い。1 点目に、/i/拡張形が/kas.i/ではなく/kah.i/となる。すなわち/s/が/h/に交替する。通時的にみて、/s/が/h/に変化すると結論づけることはできるが、共時的には不規則な交替である。

2 点目に、次節で詳しく見るようく、中止形・過去形の形成において子音語幹は通常非拡張形が使われるが、/s/語幹動詞の場合は/i/拡張形となる。

(35)	katte	kaite	kahite
	kat-te	kak-te	kah.i-te
	勝つ-NRT	書く-NRT	貸す.THM-NRT

3 点目に、定動詞直説法非過去は、子音語幹・母音語幹とともに非拡張形に-ru を接続させるが、/s/語幹は/i/拡張形を用い、しかも-ru がØとして実現する。

(36)	katu	kaku	miru	kahi-Ø
	kat-ru	kak-ru	miR-ru	kah.i-ru
	勝つ-NPST	書く-NPST	見る-NPST	貸す.THM-NPST

1 点目と同様、歴史的にみると、*/kasu/だったところに音韻変化が生じて/kahi/に転じた可能性が高い。しかし、本論文では(36)で示すように、共時的には/i/拡張語幹/kahi/に/ru/が接続し、不規則な脱落(/ru/→Ø)が生じたと解釈する。

4 点目に、定動詞禁止法に関して、子音語幹・母音語幹共に非拡張形に-runa を接続させるが、/s/語幹は/i/拡張形を用いる。その際、/ru/が不規則に脱落する。¹⁰

¹⁰ 禁止の形態素を-runa ではなく-na とすると、不規則な脱落を想定する必要はなくなる。しかし、禁止の形態素を-na とすると、現行の-runa における-ru を直説法肯定非過去と分析せざるを得なくなり、いったん直説法で屈折したものに再度禁止法が生じることになる。これは脚注4と同様、動詞形態論全般に影響が及ぶため、禁止の形態素は-runa と設定する。

(37)	katuna	kakuna	miruna	kahina
	kat-runa	kak-runa	miR-runa	kah.i-runa
	勝つ-PRH	書く -PRH	見る-PRH	貸す.THM-PRH

5.4.3. 直説法非過去肯定における促音化

母音・子音語幹に関わらず、接語が付与して促音化する場合がある。これは、直説法非過去肯定接辞-ru の r が j に同化することで実現している。ただ、促音化の容認度にはばらつきがあるため、いつ接語を付与すると捉えるかで形態音韻規則の設定が異なる。

表 14. 促音化のパターン I (促音化が容認される場合)

	入力	母音削除規則	促音同化	語幹末子音削除	出力
「行く」	ik-ru=jo	ik-r=jo	ik-j=jo	i-j=jo	ijjo
「寝るよ」	ne-ru=jo	ne-r=jo	ne-j=jo	N/A	nejjo

表. 15 促音化のパターン II (促音化が容認されない場合)

	入力	子音削除	接語を付与	出力
「行く」	ik-ru	ik-u	ik-u=jo	ikujo
「寝るよ」	ne-ru	N/A	ne-ru=jo	nerujo

5.4.4. 中止形・過去形の形成

中止形と過去形の形成、すなわち歴史的にみて中止形*te に遡る接辞類 (有元 (1990) の「テ形語尾」) との接続においては、/s/終わりの子音語幹を除き、非拡張語幹を使用する。
/s/終わりの子音語幹は、/i/拡張語幹を使用する。

中止形・過去形の形成にかかる形態音韻規則は、4つ挙げられる。

(38) 中止形・過去形の形態音韻規則

- ①促音同化規則：/r/終わりの語幹に/t/が後続する場合、/tt/となる
- ②有声同化規則：有声子音に/t/が隣接する場合、/t/→/d/に交替
- ③末子音交替規則：語幹末子音が/k/、/g/の場合.../i/に交替
語幹末子音が鼻音の場合.../n/に交替
語幹末子音が/w/の場合.../u/に交替
- ④母音融合規則：/au/→/oo/、/ai/→/aa/ (→/ja/) ¹¹

¹¹ /ai/→/ja/に交替する例は kak- の時ののみみられた。(例：//kak-ta//→//kai-ta//→/kaa-ta/)

中止形・過去形の形態音韻規則の適用順は（38）で述べたとおりであり、複数の規則が適用される。

表 16. 中止形・過去形の形態音韻規則（左から適用順に表記）

	入力	促音同化	有声同化	末子音交替	母音融合	出力
「勝って」	kat-te	N/A	N/A	N/A	N/A	katte
「取って」	tor-te	tot-te	N/A	N/A	N/A	totte
「書いて」	kak-te	N/A	N/A	kaite	kaate	kaate
「ぬいで」	nug-te	N/A	nugde	nuide	N/A	nuide
「とんで」	tob-te	N/A	tobde	tonde	N/A	tonde
「読んで」	jom-te	N/A	jomde	jonde	N/A	jonde
「死んで」	sin-te	N/A	sinde	N/A	N/A	sinde
「買って」	kaw-te	N/A	N/A	kaute	koote	koote
「貸して」	kah.i-te	N/A	N/A	N/A	N/A	kahite
「着て」	ki-te	N/A	N/A	N/A	N/A	kite
「寝て」	ne-te	N/A	N/A	N/A	N/A	nete

5.4.5. 希求形の形成

希求形の形成において、/w/終わりの子音語幹を除く子音語幹は、非拡張形に希求法-oを付与した形を認める。/w/終わりの子音語幹と母音語幹は希求法-uを付与し、/w/終わりの子音語幹は非拡張形末の/w/を/o/に交替させ、母音語幹は非拡張形末の母音を/u/に交替させた形を認める。

表 17. 希求法の形成

	入力	音韻交替	実現
子音語幹 (jom-)	jom-o	N/A	jomo
/w/語幹 (kaw-)	kaw-u	kao-u	kaoo
母音語幹 (ne-)	ne-u	nu-u	nuu

5.4.6. 変格活用動詞

変格活用語幹はカ変語幹、サ変語幹、ik語幹からなる。サ変語幹とカ変語幹は、3つの異なる語幹形式を持つ。ただし、非拡張語幹と語幹拡張母音/a/、/i/による語幹拡張という対立の子音語幹と異なり、語幹内部の母音交替による3形式が区別される。表 15 に示す

ように、力変語幹は *ku* 語幹、*ko* 語幹、*ki* 語幹の 3 形式が、サ変語幹は *su* 語幹、*se* 語幹、*si* 語幹の 3 形式がある。*ku/su* 語幹は、命令法と条件法を除いて子音語幹の非拡張語幹と同じ接辞をとり、*ko/se* 語幹は/a/拡張語幹と同じ接辞をとる。命令法と条件法は語幹の変化は変則的である。

なお、表 18において、非・/a/・/i/はそれぞれ非拡張語幹、/a/拡張語幹、/i/拡張語幹を指し、KU・KO・KI とは *ku/ko/ki* 語幹を指し、SU・SE・SI とは *su/se/si* 語幹を指す。

表 18. 子音語幹・母音語幹と変格活用語幹の対応

	子音語幹 (kak-)		母音語幹 (ne-)		力変語幹 (ku-)		サ変語幹 (su-)	
副動詞 中止形 (肯定)	//kak-te// →/kai-te/	/i/	/ne-te/	非	/ki-te/	KI	/si-te/	SI
定動詞 命令法	/kak-e/	非	/ne-re/、 /ne-ro/	非	/ko-i/	KO	/se-re/ /se-ro/	SE
定動詞 直説法 (否定)	/kak.a-n/	/a/	/ne-n/	非	/ko-n/	KO	/se-n/	SE
副動詞 中止形 (否定)	/kak.a-nde/	/a/	/ne-nde/	非	/ko-nde/	KO	/se-nde/	SE
定動詞 希求法	/kak-o/	非	/nu-u/	希	/ku-u/	KU	/su-u/	SU
定動詞 直説法 (肯定)	//kak-ru// →/kak-u/	非	/ne-ru/	非	/ku-ru/	KU	/su-ru/	SU
定動詞 禁止法	//kak-runa// →/kak-una/	非	/ne-runa/	非	/ku-nna/	KU	/su-nna/	SU
副動詞 条件法	//kak-reba// →/kak-eba/	非	/ne-reba/	非	/ku-reba/	KU	/se-reba/	SE

力変・サ変語幹は、語幹末が母音で終わっている点は母音語幹と同じであり、よって屈折接辞の異形態のとり方は母音語幹と同じである。例えば、非過去接辞-ru はいずれの場合も基底の/r/を残したまま出現する。

カ変は定動詞命令法の接辞が独特であり、本論文で設定した-e(子音・母音語幹で使用)、-re/-ro(母音語幹で使用)のいずれとも違った-iをとる。サ変は定動詞命令法において、r語幹化した ser-e と母音語幹のように-ro をとる se-ro の両方がある。

6. 上五島方言（中村 2019）との比較

本章では、中村（2019）が記述した野方言と、本論文で記述した崎山方言の方言を比較し、野方言と崎山方言の言語事実の違いを明白にする。分析方法については考慮に入れない。

6.1. 音素と音声の比較

中村（2019）が設定した野方言の音素は、表 16、17 のとおりである。

表 19. 野方言の子音音素

	両唇		歯茎		硬口蓋		声門	
破裂音	p	b	t	d	k	g		Q
			t [t ^j]	d [d ^j]				
摩擦音			s	z			h	
鼻音		m		n				n
はじき音				r				

[中村 2019 : 6、表 5]

表 20. 野方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e[e~e ^j]	o
広		a

[中村 2019 : 6、表 4]

他に、半母音音素として、j と w を設定している。

上記の表と崎山方言の音素（2. 章、表 2、3）には、異なる点が二点ある。第一に、母音音素/e/であるの実現である。崎山方言では e[e]であったが、野方言では e[e~e^j]である。ただし、崎山方言の音声データが不足しているため、再見の余地がある。第二に、声門音の/Q/。五島の方言に関する先行研究（平山 1969 など）では設定されていたが、本論文では設定しなかった。なぜなら、崎山方言では、接語が付与されると促音化する現象は見られたが、本論文で設定した語末（接辞まで）では促音終止は容認されなかったからである。

6.2. 活用形の比較

野方言では、動詞の語幹クラスを子音語幹動詞、下二段動詞、変格動詞（「する」「来る」）の4つの活用タイプに分類している。

表 21. 野方言の動詞の語幹クラス

ラベル	子音語幹	下二段	変格
終止形	kak-	agu-	ku-/su-
未然形	kaka-	age-	ko-/se-
連用形	kak-	age-	ki-/se-
非現実形	kako	agu-	ku-/su-
命令形	kak-	age-	-/se-

[中村 2019 : 61、表 21]

野方言の *ku-* の命令形は、補充形/*kee*/を設定している。崎山方言では *ku-* の命令形は/*ko-i*/になり、*oi* 連続は *ee* にならない (*kee* にはならない)。

また、野方言では下二段の終止形（直説法の接辞がつくとき語幹になる）が *u* で終わる一方（例：*agu-ru*）、崎山方言では下一段である点も異なる（例：*age-ru*）。

6.3. 屈折体系の比較

本節では、野方言と崎山方言について、用法ごとに接辞あるいは接語をとりあげ、形を比較するとともに、屈折の範疇とみなしているか否かを明らかにする。

6.3.1. 直説法

直説法の接辞について、野方言（上五島）と崎山方言（下五島）を比較する。

表 22 直説法の比較

	野方	実現形 (jom-)	崎山	実現形 (jom-)
非過去肯定	-ru	jomu	-ru	jomu
非過去否定	-ta	jonda	-ta	jonda
過去肯定	-n	joman	-n	joman
過去否定	-zjatta	jomazjatta	-n=zjar-ta	jomanzjatta

[中村 2019: 57-58 をもとに、筆者一部加筆]

過去否定について、崎山方言は-n でいったん語を閉じて否定（極性）を表わし、コピュラで時制を表わしている一方、野方言は *zjatta* の1形態素で極性と時制2つの意味を

包含している。¹²

6.3.2. 連体節

野方言と崎山方言の両方とも、終止連体の区別はなく、直説法と同形式である。

6.3.3. 命令法

命令法の接辞について、野方言と崎山方言を比較する。

表 23. 命令法の比較

	野方	実現形 (jom-)	崎山	実現形 (jom-)
肯定	-re	jome	-e	jome
否定	-rna	jomuna	-runa	jomuna

[中村 2019: 59 をもとに筆者一部加筆]

命令法では、接辞の設定は異なるものの、実現形は ku-の命令形 (野方 : kee、崎山 : koi) 以外に違いは見られなかった。

6.3.4. 希求法

希求法の用法について、野方言と崎山方言を比較する。

表 24. 意志の比較

	野方	実現形	崎山	実現形
勧誘	-de	jomode	-o/-u	jomode
	-ja	jomoja		kiroja
願望	-got	kakogotjai	kakogotja	

[中村 2019: 153、180 をもとに筆者一部加筆]

野方言では勧誘を表わす場合 jomode や jomoja になるが、崎山方言では jomode や kiroja のように実現形は同様の形が見られた。

また、野方言では願望を表わす場合 kakogotjai となるが、崎山方言では kakogotja とな

¹²過去否定を表わす zjatta と nzjatta について、久保薦 (2016) は 18 世紀前半に「ヂャッタ」という形式が見られてから 19 世紀以降に「ンジヤッタ」へと変化したと指摘しており、前者は打消ズ+アッタに由来する可能性を示唆する一方、後者は否定の連用中止形デ(ヂ)+アッタに由来する可能性が高いと論じている。よって zjatta と nzjatta は通時的に異なる語源を持つと考えられる。

り形式が異なる。

6.3.5. その他

本節では、崎山方言と野方言の違いを明確にする足掛かりとして、表 9 で調査したうち本論文で動詞屈折形態論として扱っていない内容について比較・検討する。

6.3.5.1. 疑問

野方言では、wh 疑問・yes/no 疑問共に=ne、=ka、=ja のいずれかを必ずとり、文末ピッヂの変動はない（中村 2019 : 134）。崎山方言では=to、=ka がついた疑問文が現れたうえ、接語がつかずに文末のピッヂをあげることで疑問の意味を表わすことが出来る。それぞれの疑問の接語が出現する条件は未調査であるが、筆者の調査で得られたそれぞれの疑問文を示す。

(39) WH 疑問文(接語なし)

<i>zassiwo</i>	<i>jonbatte</i>	<i>agawa</i>	<i>nanba</i>	<i>jonzjo?</i>
<i>zassi=wo</i>	<i>jom-ru=batten</i>	<i>aga=wa</i>	<i>nan=ba</i>	<i>jom-zjor.</i>
雑誌=ACC	読む-NPST=AC	あなた=TOP	何=ACC	読む-ASP ¹³

「(私は)雑誌を読むけどあなたは何を読んでいるの?」

(40) WH 疑問文(=to)

<i>dogan</i>	<i>sureba</i>	<i>sogan</i>	<i>tobikiggoto</i>	<i>natto?</i>
<i>dogan</i>	<i>su-reba</i>	<i>sogan</i>	<i>tob-kir-¹⁴ru=goto</i>	<i>nar=to</i>
どう	する-CND	そのように	とぶ-CAP-NPST=SEEM	なる=Q

「どうすればそんなに(上手に縄跳びを)とべるようになるの?」

(41) Yes/No 疑問文(接語なし)

<i>sensein</i>	<i>home</i>	<i>kuretattine.</i>
<i>sensei=no</i>	<i>homer-te</i>	<i>kurer-ta=ti=ne</i>
先生=DAT	ほめる-NRT	くれる-PST=RPT=SFP

「先生がほめてくれたんでしょ?」

¹³ 本研究ではアスペクトは未調査である。ただ、調査の段階で *jomi-tjor-ta* (/jonzjotta/) 「読んでいた」のように屈折接辞の前に出現する例が得られたことからも、*zjor* は派生接辞でアスペクトであると考えられる。

¹⁴ 語幹と屈折接辞の間に出現していることから *-kir* は派生接辞だと考えられる。派生接辞については未調査である。

(42) Yes/No 疑問文(=ka)

<i>mada</i>	<i>toberuka?</i>
<i>mada</i>	<i>tob-re¹⁵-ru=ka</i>
まだ	とぶ-CAP-NPST=Q
「まだ(なわとびは)とべるか?」	

(43) Yes/No 疑問文(=to)

<i>atugari</i>	<i>jaken</i>	<i>uwagiba</i>	<i>nuguto?</i>
<i>atu-gar-i</i>	<i>jaken</i>	<i>uwagi=ba</i>	<i>nug-ru=to</i>
暑い-VBLZ-NZ	だから	上着=ACC	脱ぐ-NPST=Q
「暑がりだから(寒いのに)上着を脱ぐの?」			

6.3.5.2. 推量

推量の用法について、野方言と崎山方言を比較する。

表 25. 推量の比較

	野方	実現形	崎山	実現形
推量	-dai	kakodai	=jaro	kakujaro

[中村 2019 : 59 をもとに筆者一部加筆]

野方言では-dai を、崎山方言では=jaro で推量の意味をあらわす。崎山方言の例文を(44) に示す。

(44)	<i>an</i>	<i>senseiden</i>	<i>uwagiba</i>	<i>nugujaro.</i>
	<i>ano</i>	<i>sensei=den</i>	<i>uwagi=ba</i>	<i>nug-ru=jaro</i>
	あの	先生=AC	上着=ACC	脱ぐ-NPST=CONJ
「あの(寒がりの)先生でも(こんなに暑い日は)上着を脱ぐだろう」				

¹⁵ 脚注 14 と同様、派生接辞と考えられるが詳細は未調査である。

7. 今後の課題

副動詞について調査が未完了であるため、記述の余地が残っている。特に、表9で示した調査票のカテゴリーとしては、否定条件（～しないと）、逆接、反実仮想、理由、同時が網羅的に調査できていないので、今後の課題としたい。

形態音韻規則について、動詞屈折形態論を網羅的に記述したとは言えないため、暫定的な設定にとどまっており、網羅的な記述を完成させたのち、再検討する必要がある。特に、それぞれの音素が実際に発話される際の音韻に関して、データが少ないために設定できなかつた。

さらに、6. 章で野方言と崎山方言を比較したことからも分かるように、同じ五島列島でも方言の言語事実についてかなりの地域差があることが明白になった。よって、動詞屈折形態論にとどまらず、野方言でも、網羅的な文法書の作成が必要である。

付録

以下では、筆者の調査で得られた崎山方言の音声を、動詞屈折形態論を記述するのに用いた例文をそれぞれの語幹ごとにまとめたものと、調査の過程で得られてまだデータがとりきれていない疑問文と副詞節に関する例文・自然談話を記述した。また、調査で得られた語彙についても記述する。

○調査例文とその音声

jom- 「読む」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	私はいつも本を読む。	orjaa ituden honba jomu.
直説法非過去否定	読まない(よ)。	joman(jo).
直説法過去肯定	読んだ。	jonda.
直説法過去否定	読まなかつた。	jomanzjatta.
中止形肯定	(昨日は本を)読んで寝た。	jonde neta.
中止形否定	(昨日は本を)読まないで寝た。	jomande neta.
希求法(意志)	今から本を読もう	honba jomoo/jonjo/jomokana.
希求法(勧誘)	この本を読まない?	kon honba jomanka/jomejo.
命令	読め。	jome.
禁止	読むな。	jomuna/jomanhooga jokajo.
丁寧	(私はこの本を)読みます。	jomimasu.
疑問	(私は)雑誌を読むけど、あなたはどんな本を読むの?	zassiwo jonbatte agaha nanba jonzotto?/jonzjo?
疑問	あなたは漫画ばかり読んでいいの?	nasite agawa mangabakka jonzotte, jokatoja?
否定疑問	(他の本は)読まないの?	jomantone?
連体節(非過去肯定)	読むときは大きい声がいいね。	jomutoki/jontoki wa ookikakoega jokane.
連体節(非過去否定)	読まないとき	jomantoki
連体節(過去肯定)	読んだ時	jonda toki/jonda tokja
連体節(過去否定)	読まなかつたとき	jomanzjatta toki

tob- 「とぶ(飛ぶ、跳ぶ)」

意味機能	標準語訳	音声

直説法非過去肯定	縄跳びをとぶ。	tobu.
直説法非過去否定	とばない。	toban.
直説法過去肯定	とんだ。	tonda.
直説法過去否定	とばなかつた。	tobanzjatta.
中止形肯定	(縄跳びを)とんで、私もびっくりしたよ。	tonde/tobikitte omho bikkuisita.
中止形否定	とばないで	tobande.
希求法(意志)	(次はたくさん)とぼう。	tobo.
希求法(勧誘)	(練習して)たくさんとぼうね。	jooke toboone.
命令	(縄跳びを)とべ。	tobe(jo)
禁止	今日は疲れるから休め、(縄跳びは)とぶな。	kjoowa tukaretokken jasume, tobuna.
連体節(非過去肯定)	とぶとき	tobutoki
連体節(非過去否定)	とばないとき	tobantoki
連体節(過去肯定)	とんだとき	tondatoki
連体節(過去否定)	とばなかつたとき	tobanzjattatokja

sin- 「死ぬ」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	(この道は見通しが悪いから)毎年誰かが死ぬ。	maitosi daikaga sinu.
直説法非過去否定	死なない。	sinan(to).
直説法過去肯定	死んだ。	sinda.
直説法過去否定	思い返して死ななかつた。	omoikaesite sinanzjatta.
中止形肯定	おじいちゃんが死んでもう会えないね。	ojiitjanga sinde imakara mirantozjanne.
中止形否定	死なないで生きたい。	sinande ikitaka.
希求法(意志)	悪口ばかり言われるから死にたい。	warugutibakkai iwarukken sino/sinitakajo.
希求法(勧誘)	一緒に死のう。	issjoni sinoo.
命令	(喧嘩している人が相手に対して)死ね。	sine.
禁止	(そんな簡単に)死ぬな。	sinuna.
連体節(非過去肯定)	(ここは毎年)誰かが死ぬ土地だ	daikaga sinutotitti kikujo.

	と聞く。怖い。	appaka.
連体節(非過去否定)	死なない時	sinantoki
連体節(過去肯定)	死んだ時	sindatoki
連体節(過去否定)	(今年は誰もこの交差点で)死ななかつたのでよかつたね。。	sinanzjattaken jokattane.

nug- 「脱ぐ」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	上着を脱ぐ。	uwagiwo nugu(jo).
直説法非過去否定	(風邪をひいたらいけないので)いやよ、脱がないよ。	ijajo,nugan/nuganjo.
直説法過去肯定	(暑いから)脱いだ。	nuida.
直説法過去否定	(寒いから)脱がなかつた。	nuganzjatta
中止形肯定	(暑いから葬式だけど)上着を脱いで弔おう。	uwagiba nuide tomuraoo.
中止形否定	(私は葬式の間)上着を脱がないでいるよ。	uwagiba nugande orujo.
希求法(意志)	(暑いから)脱ぐぞ。	nugo.
希求法(勧誘)	一緒に脱ごう。	issjoni nugoo.
命令	汗をかいているから上着を脱ぎなさい。	aseba kaitoruken uwagiba nuge.
禁止	(形式ばった場だから)上着は脱ぐな。我慢しな。	uwagiwa nuguna. gamansennne.
連体節(非過去肯定)	(上着を)脱ぐとき、汗がすごかった。	nugutoki aseno sugokatta.
連体節(非過去否定)	(上着を)脱がない時、風邪をひきたくない。	nugantoki kazeba hikitoonaka.
連体節(過去肯定)	上着を脱いだ時、(嫌な)においがする。	uwagiwo nuidatoki ijana nioigasuru.
連体節(過去否定)	(上着を)脱がなかつたとき、	nuganzjattatoki

kak- 「書く」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	(私はいつも)字をきれいに書く	ziwa kireeni kaku(jo).

	く。	
直説法非過去否定	(時間がない時はきれいに)書かない。	kakan(jo)./kaijo
直説法過去肯定	字を書いた。	jibakaita.
直説法過去否定	書かなかった。	kakanzjatta(jo).
中止形肯定	手紙を書いて出した。	tebanba kaite dahitekita/dakkita.
中止形否定	(汚い字を)書かないで	kakande
希求法(意志)	手紙を書こう。	teganba kako/kajjo.
希求法(勧誘)	あなたも(一緒に)書こう。	agamo issjoni kakoo.
命令	きれいに(字を)書け。	kireini kake.
禁止	(字を)汚く書くな。	zjaako kakuna.
連体節(非過去肯定)	(字を)書くとき、(きれいに書け)	kakutoki/kattoki
連体節(非過去否定)	書かないとき	kakantoki
連体節(過去肯定)	書いたとき	kaitatoki
連体節(過去否定)	書かなかったとき	kakanzjattatoki

kas- 「貸す」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	本を貸す。	honba kahijo.
直説法非過去否定	本を貸さない。	honba kasan(jo).
直説法過去肯定	本を貸した。	honba kahita.
直説法過去否定	(太郎は物を雑に扱うから)本を貸さなかつた。	honba kasanzjatta.
中止形肯定	貸して	kahite
中止形否定	貸さないで	kasande
希求法(意志)	(太郎が困っているので力を)貸そう。	kasoo.
希求法(勧誘)	(太郎が困っているから)2人で金を貸そうよ。一緒に貸そうよ。	hutaride kaneba kasooja. issjon kasooja.
命令	貸せ。	kase.
禁止	(あの人は物を貸しても返さない)だから、貸すな。	sozzjake kasuna.
連体節(非過去肯定)	(金を)貸すときは、(期限について)約束をした方がいいよ(いい)	kahitokiwa jakusobba sita hooga jokajo.(jokatti omoojo)

	と思うよ)。	
連体節(非過去否定)	(金を)貸さないとき	kasantoki
連体節(過去肯定)	(金を)貸したとき	kahitatoki
連体節(過去否定)	(金を)貸さなかつたとき	kasanzjattatoki

kat- 「勝つ」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	明日は勝つ。	asitaha katu/kazzo.
直説法非過去否定	勝たない。	katan.
直説法過去肯定	勝った。	katta.
直説法過去否定	勝たなかつた。	katanzjattajo.
中止形肯定	今日も勝って(明日も勝とう。)	kjoomo katte
中止形否定	今日は勝たないで	katande
希求法(意志)	明日も勝とう。	katoo.
希求法(勧誘)	明日は(みんなで)勝とう。	asitawa katooja./katoone.
命令	明日は(試合に)勝て。	kate.
禁止	(明日の試合は賄賂をもらったから)勝つな。	katuna.
連体節(非過去肯定)	勝つとき	katuhoga
連体節(非過去否定)	勝たない方が	katanhoga
連体節(過去肯定)	勝ったとき	kattatoki
連体節(過去否定)	勝たなかつたとき	katanzjattatoki

tor- 「取る」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	(ものを)とる。	toru.
直説法非過去否定	(ものを)とらない。	toran.
直説法過去肯定	(ものを)とった。	totta(jo).
直説法過去否定	(ものを)とらなかつた。	toranzjatta.
中止形肯定	太郎は 100 点とつて、すごいね。	taroono hjakutenba totte sugokane.
中止形否定	みかんをとらないで	torande
希求法(意志)	明日のテストで 100 点とるぞ。	asitan tesutode hjakutenba toruzo/tozzo/toro.
希求法(勧誘)	あなたも頑張って一緒に 100 点	agamo ganbatte issjoni hjakuten

	とろう。	toroone.
命令	100 点を絶対とれ。	hjakutenba zettai tore.
禁止	(そのみかんはまだ)食べれないのだから、とるな。	taberentojake toruna/tonna.
連体節(非過去肯定)	(みかんを)とるとき	torutoki/tottoki
連体節(非過去否定)	(みかんを)とらないとき	torantoki
連体節(過去肯定)	(みかんを)とったとき	tottatoki
連体節(過去否定)	(みかんを)とらなかつたとき	toranzjatta toki

kaw- 「買う」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	(ものを)買う。	kau/kaijo/
直説法非過去否定	(ものを)買わない。	kawan.
直説法過去肯定	(ものを)買った。	katta.
直説法過去否定	(ものを)買わなかつた。	kawanzjatta.
中止形肯定	今日はみかんを買って帰ろう。	kjoowa mikanba koote kaerozjan.
中止形否定	今日はみかんは買わないで帰ろう。	kjoowa mikanba kawande kaeroo.
希求法(意志)	(お金がたまつたから)家を買うぞ。	ieba kaoo.
希求法(勧誘)	一緒に家を買おう。	issjoni ieba kaoja/kaoozjan.
命令	新しい服を買え。	atarasikatoba kae.
禁止	無駄なものを買うな。	iranmonba kauna.
連体節(非過去肯定)	(肉を)買うときは新しいのを買え。	kautoki/kattokja atarasikatoba kae.
連体節(非過去否定)	買わない時	kawantoki
連体節(過去肯定)	買ったとき	kootatoki
連体節(過去否定)	買わなかつたとき	kawanzjattatoki

ki- 「着る」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	服を着る。	fukuba kiru/kiijo.
直説法非過去否定	服を着ない。	fukuwa kiran.
直説法過去肯定	服を着た。	fukuba kita.

直説法過去否定	(服を)着なかった。	kiranzjatta.
中止形肯定	ジャケットを着て(行こう。)	zjakettoba kite
中止形否定	着ないで行こう。	kirande iko.
希求法(意志)	(今日はこれを)着る。	kiijo/kitaka
希求法(勧誘)	(明日は)赤の服を着ようよ。	akawo kirroja.
命令	明日はこれを着れ。	asitawa koiba kire.
禁止	(結婚式で黒のスーツは)着るな。	kinna.
連体節(非過去肯定)	着るとき	kirutoki/kittokja
連体節(非過去否定)	着ないとき	kirantokja
連体節(過去肯定)	着たとき	kitatoki
連体節(過去否定)	着なかつたとき	kiranzjattatoki

ne- 「寝る」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	(今日は)10 時に寝る。	zjuujini neru/nujjo.
直説法非過去否定	(今日は 10 時に)寝ない。	neranjo/nenjo.
直説法過去肯定	寝た。	neta.
直説法過去否定	寝なかつた。	neranzjatta.
中止形肯定	早く寝て体を休めろ。	hajonete karadaba yasumere.
中止形否定	まだ寝ないで	mada nende/nerande
希求法(意志)	早く寝たい。	hajo nuugotja.
希求法(勧誘)	早く(一緒に)寝よう。	hajo nuude.
命令	早く寝なさい。	hajo nere/nero.
禁止	(宿題が終わるまで)寝るな。	nunna.
連体節(非過去肯定)	寝るとき	nuttokja/nerutoki
連体節(非過去否定)	寝ないとき	nentoi/nerantoki
連体節(過去肯定)	寝たとき	netatoki
連体節(過去否定)	寝なかつたとき	nenzjattatoki/neranzjattatoki

ku- 「来る」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	人が来る。	hitono kuru/kuttojo.
直説法非過去否定	あの人は(今日は)来ない。	anhitowa kon.

直説法過去肯定	昨日あの人 came.	kinoo anhitoga kita.
直説法過去否定	昨日あの人 did not come.	kinoo anhittowa konzjatta.
中止形肯定	宿坊して、(早く走って) came, 謝ってたよ。	nehangete kite ayamattajo/ayamazzjottayo.
中止形否定	(時間に間に合うように) 来ないで	konde
希求法(意志)	(太郎が) 来るぞ。	kuzzo.
希求法(勧誘)	(一緒に) 来ようよ。	kuude.
命令	(明日は) 学校に来い。	gakkooni koi.
禁止	(車がきてるから) 危ない！ 来るな！	abunaka! kunna!
連体節(非過去肯定)	来るとき	kurutoki/kuttoki
連体節(非過去否定)	来ないとき	kontoki
連体節(過去肯定)	来たとき	kitatoki
連体節(過去否定)	来なかつたとき	konzjattatoki

ik- 「行く」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	学校に行くよ。	gakkooni iijo/ikujo.
直説法非過去否定	行かない。	ikan
直説法過去肯定	行った。	itta
直説法過去否定	行かなかつた。	ikanzjatta
中止形肯定	(新しい家に) 行って、見たい。	itte mitaka.
中止形否定	行かないで	ikande
希求法(意志)	行くぞ/行きたい。	izzo/ikoo/ikogotja.
希求法(勧誘)	明日一緒に学校に行こう。	asita issjoni gakkooni ikozjan.
命令	早く学校行け。	hajo gakkooni ike.
禁止	危ないから行くな。	abunakaken inna
連体節(非過去肯定)	行くとき	ittoki
連体節(非過去否定)	行かないとき	ikantoki
連体節(過去肯定)	行ったとき	ittatoki
連体節(過去否定)	行かなかつたとき	ikanzjattatoki

su- 「する」

意味機能	標準語訳	音声
直説法非過去肯定	(洗濯を)する	suru/suujo/suijo.
直説法非過去否定	しない。	sen
直説法過去肯定	した。	sita.
直説法過去否定	しなかった。	senzjatta
中止形肯定	洗濯をして、	sentabba site,
中止形否定	洗濯をしないで、	settaba sende,
希求法(意志)	(早く)洗濯をしたい。	settaba sugotjajjo.
希求法(勧誘)	一緒にしよう。(しない?)	issjoni suuzjan/suzzjan(senna?)
命令	しなさい。	sero/sere/senne.
禁止	するな。	sunna.
連体節(非過去肯定)	(洗濯を)するとき	suttoki
連体節(非過去否定)	しないとき	sentoki
連体節(過去肯定)	したとき	sitatokja
連体節(過去否定)	しなかったとき	senzjattatoki

WH 疑問文

標準語訳	音声
(私は)雑誌を読むけど、あなたはどんな本を読むの？	zassiwo jonbatte agawa nanba jonzjotto?/jonzjo?
誰と(一緒に学校に)来たの？	datto kitakka?
なんで泣いてるの？	nasite nattone?
どうすればそんなにとべるようになるの？ とべるようになったの？	dogansureba sogan tobikirugoto natto? tobujooni nattanne?
今日は(縄跳びは)とばないの？	tobantone?
(字をきれいに書けるのに)汚いね。あなたは字は上手なのに、どうしてそんな風に書くの？	zjaakane. agawa jiwa zjokkatoni nasite sogenfuuni kattone?
私はプリンを買うけど、あなたは何を買うの？	orawa purinba kaubate agawa nanba kautoja?
なににするの？	nanni puttoka?
なんでプリンは買わないの？おいしいのに。	nasite purinwa kawanno?/kawantona? oisikazjatte.
いつも何時ごろ寝るの？	itumo nanzigoro nuttoka?

あなたはどうするのか？	agawa dogan suttona?
あなたは(仕事を)しないの？	agawa sentona?

Yes/No 疑問文

標準語	音声
漫画ばかり読んでいいの？	nasite agawa mangabakka jonzjotte, jokatoja?
先生がほめてくれんたでしょ？	sensein homekuretattine.
(蹴られて)痛かったでしょ？	ikkattazjaro?
まだ(縄跳びは)とべるか？	mada toberuka?
太郎は金を持たないのに、あなたは貸すの？	taroowa kaneba motantoni, antawa kahitone?
考えた方がいいんじゃないかな？	kangaetaga jokattjanakakka?
明日は絶対勝つ？(語尾が上がる)	ahitaha zettai katu?
まだ寝ないの？	mada nerantona/nentona.
明日お祭りに来る？行くの？	asita omaturini kuttona? ittona?
暑がりだから(寒いのに)上着を脱ぐの？	atugari jaken uwagiba nuguto?
あなたも(一緒に)みかんをとらない？	agamo mikanba torooja.

副詞節

標準語	音声
(女の子を)蹴ってから、泣かすのよ	kettikurete nakasunjo.
頭を撫でたけど、足をたたいたよ	atamaba nadetabate asiba tataitatojo.
蹴ってみろ	kettimire.
(なわとびを)とべるように、なった	tobugoto natta
死にたくないから、4万円の治療を受けたよ。	sinitoonakaken jonmanenno tirjooba uketajo.
おじいちゃんも死んだので、早くおじいちゃんのところに行きたい	oziitjanmo sindaken hajo ziitjanno toke ikitakajo.
(友達と)遊ばなくなっただけで、死にたいの？	asobangoto natta dakede sinitakato?
(日頃の)行いが悪いと、地獄に行くのよ	okonaino warukato zigokuni ittoyo.
汗がひどいので、上着を脱ぎます。	aseno hidokaken uwagiba nugimasu.
暑いのに、上着を脱がないの？	atukatoni uwagiwa nuganto?

(あの人は)暑がりだから、上着を脱いでいるだろう。	atugarijaken uwagiba nuidozzjaro.
字は心を移すのだから、きれいに書かないと。	ziwa kokoroba utusutojaken kireini kakanba.
早書きしてから、書いたのよ	hajagaki sitekannni kaitatojo.
朝のうちに手紙を書いてから、出した	asanuti tegamiba kaitekka dahita(dakkitajo).
見た目は汚いけど、字はきれいに書くらしいよ	mitekurewa zjaakabatte jiwa zaamani kakuttijo.
私が本を貸すから、読みな。	ogga honba kasuken jomanne.
私はお金を貸しているけど、	owwa kaneba kahitjobatte,
(試合に)勝つように、頑張れよ。	kaggote ganbarejo.
洗濯をしてから、家を出していくよ。	sentakuba sekkanni ieba deteijo.

○語彙

現在は使われていないものの、話者の方が内省をもとに発話してくださった語彙を以下にまとめます。

標準語	音声
父	tottua,totto
母	kaka
祖父	zinzi
祖母	banba
兄	ban
姉	njanja
こども	okozjo,zjazjoa
あなた	aga
私	wasja,ora,
たくさん	bissja,zamaa,zjaako
すこし	titto
水	min
朝食/昼食/夕食	asamehi/himmesi/jomehhi
麦飯	munnomehi
豆腐	tohi
着物	kimon
ぼうし	bohi

ズボン	patti
ふんどし	mahi
便所	hettin/tjondoko
はきもの	hanmon
ぞうり	zjo
てぬぐい	tenege
本家	futokae
分家	heja/bakke
目の病気	metadare
斜視	hingara
ほほ	bittan
福江	fukae
崎山	sakkjama
富江	tonme
岐宿	kisiku
くしやみ	kusjan
鼻水	zundare

○有元(1990)との比較

先行研究で紹介した有元(1990)の、「～してきた」のようないわゆる「テ形」表現が促音や撥音として表れるとする現象について、有元(1990)が用いた語彙を参考にして調査した。

語幹	～して	～てきた	～してみ た	～してみよう か	～してから
yom-	yonde	yondekita	yondemita	yondemiyoka	yondekani
tob-	tonde	tondekita	tondemita	tondemiyoka	tondekanni
sin	sinde	sindekita	sindemita	sindemiyoka	sindekanni
nug-	nuide	nuidekita	nuidemita	nuidemiyoka	nuudekanni
kak-	kaite	kakitemita/kakkita	kaitemita	kaitemiyoka	kakkanni
kas-	kahite	kahitekita	kahitemita	kahitemiyoka	kakkanni
kat-	katte	kattekita	kattemita	kattemiyouka	kattekanni
tor-	totte	tottekita	tottemita	tottemiyouka	tottekanni
kaw-	katte/koute	koutekita	koutemita	koutemiyokana	koutekanni
ki-	kite	kitekita	kitemita	kitemiyokana	kitekanni

ne-	nete	netekita	netemita	netemiyokana	netakanni
ki-	kite	kitekita	kitemita	kitemiyokana	kitekanni
su-	site	sitekita	sitemita	sitemiyokana	sekkanni/sitekanni

3.2. 節で示した有元(1990)の論を再度以下に示す。

- (1) a. [te]や[de]で表れる形
 b. 促音や撥音として表れる形

また、(1b)が許される場合の音韻規則として(2)を、(1b)が許されない場合の条件を(3)に示している。

- (2) 「テ」の部分に促音や撥音が現れる場合
 語幹末が子音の時、基底形/te/が消去されたと考える
 /kas-te# ki-ta/ [kakkita]

[有元 1990 : 81 (8)]

語幹末が母音のとき、基底形/te/の/e/を消して同化したと考える
 //de-te# ki-ta//→/e/を消去→de-t#-ki-ta→同化→[dekkita]

[有元 1990 : 81 (11a)]

- (3) 「テ」の部分に促音や撥音の現れる形が許されない場合
 語幹末子音が/r, t, n/であるとき=語幹末子音が非継続的歯音であるとき
 語幹末母音が/i/であるとき

[有元 1990 : 31 (4) a, b, (5)]

調査の結果、共通語の「テ」形に相当するものとして、[te] や [de] 以外に促音や撥音が現れる場合は、表の3形式になった。(3)を検討する以前に、データとして促音や撥音が現れる形が少ないとみ、崎山方言では当てはまらないといえる。

参照文献

- 有元光彦 (1990) 「五島列島・下崎山町方言の動詞の「テ形」における音韻現象について」『国語学』163: 86-75.
- 浦敏雄 (1968) 『新魚目町民俗誌 第二集』長崎: 新魚目町教育委員会.
- 江畠冬生 (2019) 「言語類型論と周辺諸言語から見た日本語形態法」第 20 回日本語文法学
会チュートリアル. 学習院大学, 2019 年 12 月 8 日.
- 上村孝二 (1970) 「五島列島方言の表現方法」『鹿児島大学科紀要論集』6: 33-64.
- 上村孝二 (1983) 「九州の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編)『講座方言学 9 九州
地方の方言』175-206. 東京: 国書刊行会.
- 久保清・橋浦泰雄 (1937) 『五島民俗図誌』東京: 一誠社.
- 久保薦愛 (2016) 「鹿児島方言における過去否定形式の歴史」『日本語の研究』12 (4): 18-34.
- 下地理則 (2014) 「書評－工藤真由美 (著) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』」
『日本語文法』13 (2) 167-175.
- 下地理則 (2019) 「形態論」木部暢子 (編)『明解方言学辞典』55. 東京: 三省堂.
- 中村京介 (2019) 「長崎県五島列島宇久島野方言の文法概説」修士論文, 東京外国語大学.
- 長屋尚典 (2015) 「語」斎藤純男・田口義久・西村義樹 (編)『明解言語学辞典』76. 東京: 三
省堂.
- 西島宏 (1963) 「長崎県方言概観」『人文科学研究報告』12: 34-41.
- 服部四郎 (1950) 「付属語と付属形式」『言語研究』15: 1-26, 103.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智・ヒュー・クラーク (1969) 「五島列島の方言」『都市研究調
査報告』24-103.
- 古瀬順一 (1983) 「7 五島の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編)『講座方言学 9 —
九州地方の方言』175-206. 東京: 国書刊行会.
- 渡辺己 (2014) 「形態論入門」2014 年言語学会夏期講座. 名古屋大学文学部東山キャンパス,
2014 年 8 月 18 日～23 日.
- Haspelmath, Martin and D.Sims (2010) *Understanding morphology*. 2nd edition. London: Hodder
Education.

グロス一覧

AC	adversative conjunction	逆接
ACC	accusative	対格
ADN	adnominal	連体
ADV	adverbial	副詞(的)
ADVZ	adverbalizer	副詞化
ASP	aspect	アスペクト
CAP	capability	可能
CND	conditional	条件
CONJ	conjunction	接続助詞
COP	copula	コピュラ
FN	fomal noun	形式名詞
HORT	hortative	勧誘
IMP	imperative	命令
INT	intentional	意志
LOC	locative	場所格
NEG	negative	否定
NPST	non-past	非過去
NRT	narrative	継起
NZ	nominalizer	名詞化
PRH	prohibitive	禁止
PST	past	過去
RPT	reportative	伝聞
SEEM	seeming	様態
SFP	sentence final particle	終助詞
THM	thematic vowel	語幹母音
TOP	topic	主題
VBLZ	verbalizer	動詞化

謝辞

本論文の執筆にあたり、大変多くの方々にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

指導教官の下地理則先生は、2年次の研究室配属から卒業論文の執筆まで、手厚くお世話してくださりました。言語学の基礎知識もままならない私に、丁寧かつ分かりやすい指導をして下さったおかげで、方言を記述するおもしろさや難しさを、楽しみながら本論文を執筆することができました。

崎山方言の方言調査を行うにあたり、五島の方々に大変お世話になりました。郷土史家学芸員の中村真由美先生は、五島の方言について無知な私に、五島の方言の面白さを教えてくださったとともに、調査方法の再考や論文の方向性についてご指南してくださりました。崎山方言話者の牟田ナル先生は、ご自身が教育現場でご活躍されていた経験をもとに、私に分かりやすく「さっきやま」の方言を教えてくださったとともに、おいしいご飯もふるまって頂きました。崎山地区公民館の里中公子様は、お仕事がお休みだった土日の調査にもかかわらず、公民館を使わせてください、調査をしやすい環境を整えてくださいました。また、五島市教育委員会のキャサリン（吉原伊津子様）は、五島の方言の話者の方を紹介してくださったり、ご自身のお仕事についてお話ししてくださったりと、方言調査の域を超えて、新たな知見に触れる機会をくださいました。

研究室の先輩方・同期にも大変お世話になりました。占部由子先輩、松岡葵先輩、宮岡大先輩は、雑談を交えながら、分かりやすく言語学の基礎を教えてくださったり、本論文の執筆にくじけそうになった私を精神的に支えてくださいました。ゼミ同期の山本菜月さんと三井桃子さんや他ゼミのみなさんとは、各々の論文執筆の進捗を語り合いつつ、卒業論文提出までお互いを鼓舞しあうことができました。

最後に、突拍子もなく五島の方言をやりたいと良い始めた私のために、自身の人脈を使って五島の方々と結び付けてくれた母と、文学部に行きたいという理由で地元長崎を出ることを容認してくれた父に、感謝申し上げます。